
アクマふえいす！

越塚 spring

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクマふぇいす！

【NNコード】

N4859F

【作者名】

越塚 spring

【あらすじ】

高校生、亜熊婁士は、人読んでアクマ。恐ろしい容姿によつて絡んでくる不良とのケンカに明け暮れる内に付いたあだ名はアクマ『ルシ』ファー。これはアクマの顔をした、孤独な青年とその他大勢の物語、 だと思う多分。

あべみらかこ（繪書家）

今度はあやんと書きますとも！ 誰に対しての言い訳だらけ。前の作品を見てくださった方。いずれもひとつ書かれて魅（呪）せます。

あくまふえいす

今期より高校一年生の亞熊 妻士は現在、非常に困っていた。

駅を抜けた先の広場の雑踏、その隅、妙に注目を集めている場所があつた。誰もが視線を送っているのに、それにまるで興味が無い振りをして通り過ぎて行く人々に違和感を覚えて立ち止まつたのが愚かだつたのだ、と妻士は今更ながらに思つた。

普段ならそんな事はしない筈なのだが、新たに越してきた住居の掃除を終え自分の荷物を整理し終えて達成感というか気分が高揚していた妻士はその足で買い物に出かけた。何となく、今日はいい日だと思つていた。

だからかもしれない。見なくてもいいもの見て、聞かなくてもいいものを聞いてしまつたのは。

「や、やめて、ください……」

それはか細い、風に溶かされて消えていくような、そんな小さい声だつた。

小さい少女だつた。ふとすれば小学生かという風体に見えたがそれは流石に失礼だ。学校の制服を着ている事からも中学生だろう。その姿にどこか見覚えがある気がしたが、男の体に隠れて顔も見えないし今はそれはどうでもいいと、思考から除外する。

その少女の状況、それが妻士が足を止め、そして通行人が視線を送る一番の理由だつた。

「ね、いーじゃん？ ちょっとお話ししようって言つてるだけじゃん？」

「そー、そー。俺らしい店しつてンだ。こつからも近いし、どうせならバイクあるし？」

「時間掛からないよ。ホントに。ね？ いいっしょ？」

三人。いかにも今風のちょいワルといった風情の格好をした三人組。根っからの不良よりは一般人寄りなのだが、自分の自己顯示欲

が強く、周囲にちょっかいかけるタイプの人種だ。

それは明確な悪ではないが、少なくとも、少女を困らせてはいるようだった。

「本当に……私、友達と待ち合わせしているんです」

「えー、そうなの？ ま、人を待たせる友達なんてほつといひわざ

一

「メールでもしどけば平氣だつて。ね？ それとも友達も一緒にどう？」

「で、でも……」

男たちは空氣を読めないのか、それとも読んでいるからこそ敢て熱心に誘うのか、少女は明らかに怯えていたのは離れていた婁士にすら分かつた。

その熱心さにはむしろ感心さえした。そんなに少女がずば抜けて可愛いのか。まあ、感心しても、その行動を是としたわけではないが。

婁士は手に持ったビニール袋と、頭半分以上を覆つづばのある帽子に一度だけ視線を向けて溜め息を付いた。

亞熊 妻士（あくま るし）今期より高校一年（予定）

極々普通の彼には一つだけ、他人と異なるところがあつた。

「おい
「ああんー？ なんだてめえしゃしゃりでんじや…………ねえ
……」

そろそろお節介な誰かが声を掛けてくると予想していたのだろうか、金髪の不良1（仮定）は婁士が男だと確認するや否や直ぐにねつづけた。

が、帽子の奥、婬士の瞳と田^たが合つた瞬間、青ざめて声は尻すぼみに消えた。

「ん？…………何黙つてんのお前？　おい、兄ちゃん、正義の味方気取りですかー？　場違いなんだよー？　消えれば？」

スキンヘッドにだぼだぼの服を着た男が、青ざめた男を不思議そうに横目に見ながら、婬士の胸倉を掴んだ。この中ではリーダー格のようでそれなりの筋肉と凄みがある。

帽子の奥、暗い闇のようない影の奥、周囲からは見えないその奥の中と、不良リーダー（仮）の視線が絡む。

「　　フヒ！」

その瞬間、男は怯えたように婬士を突き飛ばす、　　ような動作をした。

突き飛ばすように押したつもりだったようだが、婬士の体は全く動かず、作用反作用で尻餅を付いたのは不良リーダー（仮）の方だった。

呆然と、婬士を見上げる男。

「大丈夫か？」

手を差し伸べて、もう一度視線を交差する。笑顔を作つてみた。

男は今度こそ完全に顔を青ざめた。

「わ、あああああ！」

尻餅をついたまま器用に後ろに下がる。

婬士は無言で立ち上がった。いつもの事なのだから気にする必要はなく、気にしてもらえない。　　ない、筈だ。

「…………少し言いたい事があるんだが、いいか？」

「な、なんなりと」

男二人は青ざめた顔で高速で頭を縦に振った。残つた一人が事態が掴めずに男たちに何事か聞いていたが、全く耳に入つていよいうだつた。

婬士は男たちに囲まれた少女を指して言った。

「この子は俺の知り合いだ」

嘘だ。初対面である。

だが、そんな事が男たちに分かるはずもなく、青ざめていた男たちの顔が真っ青を通り越して真っ白になつた。

「すいませんでした！」

男一人は、不思議がる男一人を問答無用で脇に抱えると、脱兎の如く視界から消えていった。早業。

「…………」

ふと視線を感じる。絡まっていた少女の視線だ。ただそこに浮かべられた表情はわからない。

無論、少女が自分に向けて視線を送っている事に婬士は気が付いた。が、顔を合わせないようにしていった為、その表情までは分からなかつた。その瞳に映るのは怯えか、それとも……。

「…………」

が、どちらにせよ、視線を合わせたら全てが失敗する。泣かせてしまつだらう。怖がらせてしまつだらう。

婬士は何も言わずに立ち去る事にした。無論、キザな理由なんかではない。切実に自分の為にである。

「ま、まつてください…………」

「わつ」

後ろを向いて去ろうとした婬士のシャツを少女が掴んだ。その事に驚いた。どのくらいかと云うと、心底。思わず、振り返つてしまつた。

その瞬間、少女と視界が交錯する。

その子は、本当に少女、という言葉がぴったりな、子猫を思わせる風貌の、髪の長くて背の小さい女の子だった。その瞳に貯められた涙に一瞬見入る。

「あ…………！」

と、少女の顔が見る見る青ざめてシャツから手を離した瞬間まで、婬士は自分の失態に気が付かなかつた。

しまつた。

少女の瞳は下から貯められていた涙がボロボロと溢れさせ、その場に座り込んで硬直した。

喉が何度も引きつる。ああもう駄目だと諦めた。

少女の瞳に映つた、帽子の奥に隠されたその顔、表情、なにより猛獸を思わせる凶惡な鋭角の三白眼。

「ハヤシのやうな人間が、おまえのやうな人間を殺すとは思ひ難い。」

普通の彼には、一つだけ、他人と異なる所があった。
亜熊婁士。今期より高校一年生。性格、成績ともに極々

それは、鋭く尖った三白眼とまるで獸のような犬歯が覗く口元があいまつて、まるで、物語に現れる『アクマ』のように見えることであつた。

あべまふぇこす（後書き）

最近は寒いですね。そろそろコタツの時期かもしれない。

恐怖のアクリマ鎮座ましまし（前書き）

やつたつほーいやつほほーい！　一話目掲載出来ました。正直眠
い。でもテンションなら誰にも負けない！今はそんな気持ちです。
ちょっとでも興味を持つてくれた方、どうもありがとうございます。

恐怖のアクマ鎮座ましまし

一章　『おかしな先輩と、猫かぶりの同輩と、アクマな後輩
『恐怖のアクマ鎮座ましまし』

私立『太桃高等学校』とは。

首都から三十分の距離の朱雀市の中心から西南に位置し、程よく交通機関に恵まれ、程々に高い学力と、高い授業料で有名な、所謂お嬢様、お坊ちゃん学校である。

当然の如く長い歴史と格式を持つていて、入学生にも『それなりの家督の嫡子、もしくはその関係者が集う場所』なのだという暗黙の了解もあるくらいであった。

しかし、校則自体に厳格な決まりはない。もちろん一般に公募も行っている。勉学と金銭に困らない人間ならばよほどの事が無い限りは、それなりの割合で入学する事が出来る。

当然、転入も可能ではある。

ただし転入の手続きに関しては高いハードルが幾つも設けられている。格式ある学校と云つものには色々事情があるからだ。

しかし、今回の転入に対して、これらのハードルは全く必要がなかつた。

簡単である。この学校の総締めといつべき理事長によるたつた一つの推薦状。

それ一つで片は付いていた。一応簡単なペーパーテストを受けてもらつたが、その生徒は高い成績を出し、学力にも問題がなかつた。

ただし、一つだけ問題があつた。

それはその生徒が、一体いかなる経歴の人間なのか一切が不明な事、だつた。理事長の推薦状がある位だ。半端な家系ではないのは予想が付く。ただ、それがどこぞこの家だと、事前に知らされていない身としては心苦しい。少しの粗相がこの学校では不祥事に変わ

る。

太桃高等学校、校長、鶴山 秀男は大きくため息を付いた。

豪華な調度品が並ぶ来賓室のいかにも高価で座り心地の良さげな一席に座りながらも、その顔は優れなかつた。

その体型はメタボの一言に尽き、禿げかけた頭に、老けた顔には四十六歳の中年も六十の老人にすら見えた。

理事長の『気まぐれ』には慣れていたつもりだつたが、それでも秀男はその『気まぐれ』に対する心労は、いつまでたつても減らないままだつた。それも、滅多に学校に口を出さない事を考えればまだ楽な方ではあるが。

禿げかけた頭を摩りつつ、秀男は緊張を崩さないまま静かに田の前の扉を見つめ続けた。

コンコンコン。

やがて、控えめなノックの音が響いた。

「…………ど、どうぞ」

思わず、声が上擦つた。いけない、と自分を秀男は戒める。とにかく腰を低く対応しようと思つた。下手な事はせず、笑みを浮かべていればいいのだ、と。秀男は給金の為、と思えば、その程度の屈辱、幾らでも耐えられた。

「…………失礼します」

「…………いやあ！ どうも、私が校長の鶴や、ま…………」

丁寧に開けられたドアの向こうにある顔を見た瞬間、秀男は失礼や無礼などといった単語を頭から弾き飛ばして、口を半開きにして停止した。

「…………」

入室したや否や、秀男のこのよつた反応に、真熊 妻士はたつた一行、こう思つた。

(こんな反応、こつちはとつぐに慣れてゐるぞ)

秀男が見つめていたのは、妻士の顔。オールバックの赤毛。牙のよつた大歯、そしてなにより強烈な存在を放つ、鋭い、猛獸も失禁

させる勢いの三白眼。

それはまるで獣、否　まるで物語に現れる、悪の権化。

「これはアクマの顔を持つ真熊婁士を中心とした、様々な人々の物語。

「…………ね、ねえ、あれが噂の転入生？」

「…………そうみたい」

「…………なんなんですの一体」

「…………口ワ」

「…………正直私、直視出来ないわ」

「…………私も」

ひそひそ。ひそひそ。

太桃高等学校二年一組はある種、緊張状態にあつた。廊下にはいつの間にか人気店開店待ち並みの密度で人だかりが出来ていて、それぞれが声を潜めて噂し合っていた。

前日より異例の転入生という存在には校内学年を問わずに話題的だつた。はやる気持ちを抑えきれずに一刻も早く見に来た生徒と、それに釣られた生徒達。

質問したい事は山ほどある。

しかし、彼らは絶対に教室に足を踏み入れようとは思わなかつた。二組は休み時間にも関わらず一組の生徒全員が一向に席を立たずに入り。何か作業をしているわけではなく、ただ単に座っているだけだがその瞳は伏せられ、誰も口すら利かない。

野次馬の如く集まつた生徒はまずこの光景を見て、そのあまりの緊張感に息を呑む。

そして、その諸悪の原因たる存在を見て、息を咽、そして納得しきつ安堵するのだ。

ああ、このクラスじゃなくて良かつたな、と。

そして安堵して尚、離れられない。それはその緊張の糸がいつ切れか分からぬ状況で動けなくなつてしまつのだ。

そんな事が起きてしまつたのだ。

たつた一人の生徒によつて。

そして、転入してからたつた三十分弱で諸悪の根源にまで祭り上げられた真熊。婁士は最後尾の席で机に突つ伏したまま、『帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい』と半ば本氣で呟いていた。

それがさらに生徒の恐怖を煽つてゐるとは知らずに。

「こえええ……。何かブツブツ言つてる

「やつべええよおい……」

「……私もういやあああ……！」

「落ち着け……！ 死ぬぞ……！」

ひそひそ。ひそひそ。

その顔を見た後では婁士のその突つ伏した姿ですら、ある種恐怖のオーラ的なモノを纏つてゐるように見えて、とてもじやないが顔を直視するだけでパニックすら起きかねなかつた。

婁士は本気で帰ろうかな、と思つた。しかし転入初日にサボればもう確実に不良になる、と思うとそもそも出来ない。根が眞面目なのだ。

そしてその他生徒も動けないまま。

地獄のような時間の中その場にいたありとあらゆる人物はきつ思つたといつ。

早く授業の鐘が鳴つてくれ。

それは大半の学生が初めて思つた、授業に対する狂おしい程の欲求だつた。

恐怖のアクリマ鎮座おこし（後醍醐）

眠ります。ぐつすりと。

迎印 それはアクマの導き（前書き）

婁士のキャラは随分前から決まっていたはずなのに書いてみると意外と難しい（ほんとに）。そこで何も考えずに成りきって書きます。出来た。もしかして天才じゃなかろうか。いや、今度はキャラに成りきらずきて文が若干意味不明に！

迎合 それはアクマの導き

七月の上旬。

夏の日差しが近づく中、真熊 妻士は一人、人の居ない場所を探して歩いていた。

先生が軒並み転入生にビビるサプライズの後、休み時間なのに誰も席を立たないばかりか喋りもしない状況を見て、妻士は今まで経験に則つて休み時間中は別の場所で時間を潰そう、と考えたのは四時間目の終わりごろだった。

妻士はベタに屋上、とも考えたが現実問題、施錠されて入れなかつた。

仕方なしに妻士は手近かな空教室を探す事にしていった。今日だけじゃない。これからの中学校生活で使えそうな人の居ない、一人になつて落ち着ける場所を。

「どこの学校も変わんねえな……」

無意識に妻士呴いた言葉には様々なニュアンスが込められていた。今までの学校と変わらない。今までの人間関係と変わらない。つまらない生活。そしてケンカ。

違う、と否定する。それらは確かに詰まらない。しかし、

「…………一番つまんねえ奴なのは、俺だろ」

それはどこか慟哭にも似っていて。自嘲的に口元を吊り上げた姿は

滑稽な道化師のようだつた。妻士は知つてゐる。一番変わらないのは自分で、一番変わるべきなのも自分だと。それが出来れば苦労はない。

それにして空き教室が多かつた。手短に近くのドアを開けようとしても開かない。どうも、こここのセキュリティ管理は物凄いらしい。空き教室で鍵が開いている部屋が一つもないのだから。人の居ない方に歩いていく。その時、妻士は思い出した。この学校はあほっちゃん校なだけあってその校舎の広さは異常だった。そこらのマンモス高（定員の多い学校）を遥かに凌駕している事に。まず校庭の広さが陸上競技の公式グラウンドである時点でどのくらいかは想像が付くだろう。そもそも中庭の広さ自体が普通の校庭近くにあるのだから、しかるべき校舎はそれに合つたジャンボサイズだ。普通の学園だつたならば全学年を収めるのに一階だけで事が足りる。それを何も考えずに、どころかちょっと感傷に浸つて無意識に歩を進めるなどしていればどうなるか。想像に難くない。

端的に言えば、妻士は完全に迷つていた。

（あれ？）

妻士は慌てて辺りを見渡す。誰も居ないのは当然だ。居ない方に歩いてきたのだから。目に付くのは無機質などここまでも続く廊下。出来れば人に会いたくはない妻士だつたが、背に腹は帰られなかつた。数秒悩んだ後、とりあえず手じかなか教室内眺めていく。

「…………ん、第三図書室？」

妻士は空教室を覗いている内に、電灯の光が灯つてゐる幾分幅の広い部屋、図書室を見つけた。

「第三図書室？」

妻士は首を傾げた。その言葉に軽く違和感を覚えたからだ。

「『第三』図書室？」

第一、第二ぐらいまではまだ分かるが、第三ってなんだよ。

「…………多いな図書室。そんないらんだろ？」「…………

と、呆れて呟く。

でもまあ、と氣を取り直す。ここには人が居るかもしないのだ。
扉に手をかける。鍵は掛かつていなかつた。

「失礼します」

婁士はおそるおそる中を見渡した。図書室の中には人の気配は感じず、実際、婁士の見渡した限りは誰も居なかつた。

まるで人が使つた後が無い。教室一つ分くらいの広さに、人が座るカウンター、そして横幅一メートル程度の本棚が無数に並んでゐる。もちろんカウンターは無人でどうも誰かがいた様子も無さそうだつた。備え付けられたパソコンも電源が落ちていて、わずかにホコリを被つてゐる。

電気も付いていて鍵も開いているのだから、人はいるのだろうが。お化けかなにかの部屋だらうか、などとふざけた事を婁士はおどけて考えた。

そう、そこはまるでお化けの住む場所にすら遠慮しそうな無機質な部屋で、まるで何かが生きる為の部屋ではないような、そんな気さえ婁士は感じる。締め切つたカーテンもその要因の一つだらう。図書室には、電灯の無機質な光しかないから。

備え付けられた時計が音を奏でる。やけに大きく聞こえたのは婁士の勘違いだらうが、どこか嫌な音に感じた。時計の針の音は、一層孤独を感じるような一人を意識させられる音だから。

びゅおおお。

「うお？」

突風が突然部屋を包んだ。風が部屋を廻り、そしてドアを潜つて廊下に流れていく。

よく見れば図書室の奥の、本棚の上から辛うじて見える窓の上部から鮮明な景色とひらめくカーテンが見える。窓が開け放しになつてゐるようだらう。人がいるならばそこにいるかもしれない、と婁士は閃いた。確かめようとして、しかし誰も居なくとも図書室で大声を出すのはまずい氣もある、と考え直す。

本棚を縫つて、その窓に向かつて近づいていく。

風の音が部屋に響いた。と、同時に婬士は部屋の奥に辿り着く。窓から入る光は夏を控えた太陽そのもので、婬士は一瞬眩しさに目が眩んだ。

「ん、志穂くんかい？」

日光を遮る為に手を翳すと、そこに人を見つけた。

凛として涼しげな、風鈴を鳴らすような綺麗な声だった。その人は本に目を落としていて、婬士の方を見ていなかつたので誰かと間違えているらしい。

綺麗な女性だつた。制服を着ているから歳はそんなに離れているわけではないだろうに、婬士はその女性が大人びて見えた。全体的に線が細く、しなやかな白魚のような指が本のページを捲る様だけで絵になつてゐる。肩まで伸びたさらさらとした髪。それが風によつてなびいて、白い頬を撫でてゐる姿は酷く幻想的だつた。

しかし、婬士にはなんと表現すれば分からぬが、その女性の意思の宿つた強い瞳が、女性に存在感を与えてゐる、そんな気がしていた。

婬士が何も言わずにいると、女性はそのまま静かに本を読み続けていた。

「…………？」

ふと、婬士、ではなく女性が勘違ひした志穂、とやらが何も言わない事に気が付いたかゆつくりと女性はこちらに視線を向けた。

その視線は婬士には固まつた。理由は自分でも分からなかつた。視線が絡む。

婬士と女性はたつぱり数秒は見詰め合つていた。

それは本当に不思議な物を見るような視線で、まるで存在しないはずの物が目の前にあつた、そんな時のような顔だつた。

「…………」

婬士は思い出してぱっと顔を手で覆つた。

そりや、そんな顔するよな。こんな化け物みてーな野郎が

目の前に居たら。

自分の失態を呪つた。こんな人気のない場所で一人きり。

「何故、顔を隠すんだ」

しかし、女性はそんな風に、「よく普通に聞こえる聲音で婁士に尋ねた。婁士は内心、驚いていた。うまく言葉が出ない。

「……だつて、怖いだ……ですよね。俺の顔が」

だが、その言葉に女性は口端を鋭角に上げた。

「君が、怖い……？　くくく、成る程、おもしろい意見だ。参考にしよう」

女性は、初めて会つた婁士に怯える様子もなく、真っ直ぐに婁士を見上げた。

「ふむ、さては君が噂の転校生かな」

尋ねるような言葉だつたが、声には奇妙にも確信が籠つていた。

婁士はその言葉の意味を理解した。女性のその婁士の迫力を意にもしない態度に、奇妙な感覚を覚えつつも婁士は望まれるまゝこう言った。

「どうして分かつたんだ……ですか、と尋ねた方がいいですか」「女性は笑う。薄幸の美少女なら絶対しない類の、ニヒルな笑い方だつた。

「いいね、良い質問だよ。さて、理由は一つ。『悪評は千里を走る』、という通りなんだよね。君の噂は今や学校中で持ちきりだ。内容は、　　聞きたいかい？」

「いい。聞きたくない、です。…………それで、二つ目はなんですか」

「二つ目は、君がここに居るから、それだけさ」

女性は両手を広げた。婁士は首を傾げる。

「俺が、図書室に居るのがそんなにおかしいか？…………なのですか？」

「くくくく。いや済まない。説明の仕方が悪かったね。これは内事情があつてね。この学院の人間は滅多な事ではここに来ないよ」

そう言われば、確かに人の気配がしなかつたしな。

妻士は納得する。

女性はからかうような表情で妻士に訊いた。

「内事情が聞きたいかい?」

「正直は。でもまあ、あえて聞き……ません」

「……ほお、どうして?」

女性は妻士に尋ねる。

「貴方が言いたく無さそうだから」

「…………」

きょとん。

そういう音が一番似合ひ、そういうほほかんとした表情で女性は固まつた。

「…………く、くく、あはははははははは…」

そして大声で笑い出す。

「ははははははは！」

「…………」

「いいね、君は面白い！ こんなに笑えたのは久しぶりだ。えーと、ああ、自己紹介がまだだつたね。私は翼だ。名前で呼んでくれ。

私の名は翼。君の名前は

「真熊 妻士」

「真熊妻士、妻士か。妻士、君にまず言つて置く事が在る」

「なんで、すか」

翼、そう名乗った女性はまたおかしそうに田元を細めてこう言つた。

「君の敬語は酷く不恰好だからやめたまえよ」

妻士を怖がらず、恐れない、不思議な空気を纏つた翼。

不思議な女性だ。

妻士はそう思った。

怯え、恐れ。

以前からその兆候はあったが、妻士が中学に上がる頃からそういう

つた視線は段々と増えていった。身長も伸び始め、歳を重ねる」と
に鋭くなる瞳にいつしか、自覚の無いまま婁士は周囲の人間から離
れられていた。代わりに近づいて来たのは、戦いの日々。始めは同
輩、やがて先輩そして見知らぬ誰か。襲われるたびにさらに周囲の
人間は離れていく、そして向かってくるのは身勝手な理論で喧嘩を
仕掛けてくる誰か。それすらも、なし崩しに減つていった。
どこかで諦めていた。そういう人生が続くのだと。毎日のように
に続く恐れと嫌悪の視線は消えないのだと。だからその翼の自然な
態度に、婁士は困惑していた。それが何という感情だったか、すぐ
には思い出せそうに無かつた。

でも、こんな出来事も悪くない。そんな風に思つた。

迎合。それはアクマの尊き（後書き）

変なところで切った。なんでここで切ってしまったのだろうか。次回に期待。

五話・おかしな先輩とアクマな後輩（前書き）

更新遅れました。見ている方々、こんな物ですがどうか見捨てないで下さいマル

五話・おかしな先輩とアクマな後輩

「うーん、風が心地よいね。婁士君」
ざああ、と風が辺りを舞う。翼の手に持った本がパラパラと捲れ、
吹き抜けて図書室から廊下へと流れしていく。太陽の日差しも丁度校
舎の真上を差して、一人だけの図書室は、暑いものの、息苦しさは
感じない。

「はい」

散々迷つてから無難にと、婁士はそう答えた。

「私はクーラーが苦手でね。どうにも敬遠してしまつ」
カーテンを上げて閉め切つた窓を開放していく翼。手馴れた手つ
きでカーテンを纏めて横のフックに掛けていく。婁士も手伝つてい
たが、婁士が一つ纏める内にその四つをあつといつ間に終わらせて
いた。

「いや、ありがとう。そろそろ暑くなくなる頃だったからね。いつも昼休みの始めにやつてしまつんだけど、今日はお手伝いが休み
でね」

「お手伝いですか？」

「ああ、後輩だよ」

翼が窓辺に座りなおしたのを見て、婁士もそこら辺の椅子を取
つて座る。一つ、妙に小さい椅子があつたがそれには座らないよう
に翼から言っていた。

「で、どうだい、この学校の感想は？」

「え？」

唐突に翼がそう切り出した。

「あ、えつと、綺麗ですね。とても。前の学校の数倍は綺麗です」

「？ 当たり前だろうつ。専門の業者がやってるんだから」

当たり障りない返事をしたつもりだったが、翼は逆に不思議そうな
顔をした。

「え、業者が全部ですか？」

「そうだが」

「の学校はかなりのマンモス校だ。前の学校は公立だつたけどこ
こは私立だし別に業者がやつていて不思議はない。と、妻士はそこ
まで理解する。

「ああ、それはそうですね。こんな広い校舎生徒が掃除していた
らキリがありませんもんね」

同意したつもりが、今度は怪訝な顔をされる。

「……というより元々生徒は掃除なんかしないだろう」

「え？」

妻士は咄嗟に理解出来なかつた。

「掃除なんて全て専門の者がするべきだつが。ここは学びやだ。
学ぶ以外に何をする」

当たり前の事を当たり前に言つてゐる、と至極真面目な顔で翼が
頷く。妻士は会話が噛み合わない不思議な違和感を感じた。それは
とんでもなくズレている。そんな嫌な予感だった。

「そもそも、他の学校では知らないが、この学校は学ぶ事も含め
て全てサービスだ。学食は給仕が運ぶし、主要な階段にはエスカレ
ーターが付いているし、無論エレベーターは各階に四つは配置され
ている。執事を連れている者も居るが、その執事でさえ女中のする
べき掃除などは行わないだろう。ましてはその紳士淑女がそのよう
な事を行うなどと、君は面白い事を言つ」

翼の顔は何かの冗談を訊かされたそれだ。自分が「冗談を言つてい
ると認識した顔ではないように見える。

「…………思い出した」

妻士は、頭を押さえた。

私立太桃高等学校は、『超お嬢様お坊ちゃん高校』だつたと。世
間知らずの妻士でも知つてゐるような事を全く知らない『紳士淑女』
が集まる場所だと。

妻士をここにぶち込んだ年上の従兄弟が説明してゐた。

「じゃあ、今日ここに来るまでに見た大量のリムジン見たいな横長の車の数々は……」

「無論、送り迎えする車に決まっているが」

頭が痛くなってきた。

とんでもなく場違いな自分。それはさつきまでとは別の意味で婬士は理解した。どんな異世界だよ、と自分で突っ込む。

そもそも、と婬士は考える。

自分がこの場所に居る事 자체が摩訶不思議な現象だ。とある事情で学校を辞めざるを得なかつた自分をどんなコネを駆使したらこんな高校に enter 出來るのか分からぬ。両親とも普通の家庭なので従兄弟の権力なのはまず間違いないのだがその権力 자체がそもそも怪しい。どこに持つてんだよそんな権利。むしろ怖い。後で要求される『物』が怖い。従兄弟怖い。

婬士が唸つていると、翼は口元に手をあてて少し笑つた。

「やつぱり君は面白い」

「ん？」

と、婬士が顔を上げると、さつきまでの怪訝な顔ではなくまた一ヒルな笑いが待つていた。

「さつき言った事は、半分嘘だ」

「はい？」

翼がニヤリと笑う。

「これが、この学校で言つ『常識』である事は間違いない。が、私の見解は違う。君の混乱は分かる。とんでもない学校だろ。私もそう思つ」

婬士が首を捻つて眉をひそめると、さらに続ける。

「でもまあ大概の生徒はそういう感じだよ。まさしく箱入り娘達ばかりだから。だけど全部が全部庶民の庶の字も知らない分けじゃない。ま、精々、七割くらいかな」

「…………つまり？」

「悪いね。ちょっとからかった」

片手を挙げるよにして、詫びれた様子もなくそう言った。

「先輩、…………意外とお茶目なんですね」

「ああ、そうかもしれない。でもこれはこの学校に入学する『庶民派』が必ず通る登竜門なんだ。だからといつわけではないが、い練習にはなつただろう?」

脱力している婬士に翼はそう笑いかける。婬士も笑い返すがその口の端は若干ひきつった。

この人、分からん。

「君は予想通りどうやら『庶民派』らしいね」

「その、しょみんは、って何ですか。派閥?」

翼は少し、言葉に間を空けた。

「うーん。これを言うと大概皆気分を害すると思うのだが。ま、話し半分に聞いた方がいい。代々歴史ある家系で、太桃の付属の小学校からエスカレーターで上がって来た奴らが使っている言葉さ。ベンチャー企業なんかの社長で、一代で財を成した者達、敢てそいつ等の様に言うなら『成金』の娘息子達が途中で転入して来るのに対してそう呼んでいるのさ。今ではかなり学校に浸透して、幾つか本当に派閥がある。『本校派』と『転入派』のような感じに」

「…………ユニークな学校ですね」

顔を婬士が歪ませる。悪魔の顔の凄みが増す、ようにも見える。それがちょっと眉を寄せたに過ぎないとしても。

「まあ、端から見ている分には問題ないが、本人達にはデリケートな問題だ。そつとして置いて上げるのが賢明だと思うがね」

婬士は顔を歪ませていたが、はつと何かに気が付いたように目を少し開けて 翼には一瞬何か憑依したようにしか見えなかつた、そしてがつくりと効果音が出そうな感じに顔を下げた。

「…………そういうや、そもそも俺、顔怖いし。その問題に触れる事多分ありませんよ」

「そんな事はない。君はもうとっくに関わっているぞ」

「いや、慰め(?)はいいです」

しかし翼は、首を振る。頭を下げていたのでそれを見えなかつたが、気配を察して斐士は顔を上げる。

「何故なら、私が『本校派』の人間だからさ」

五話・おかしな先輩とアツクマな後輩（後書き）

ちよつと文体を変えました。良くなってこむと良いのですが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4859f/>

アクマふえいす！

2010年12月11日04時11分発行